

# アクティブ・ラーニングの視点で問い直す 生活単元学習の指導に関する実践研究

ー小・中・高12年間で子どもたちのもつ力を引き出す授業づくりー

○吉松靖文\* 榎木暢子\*\* 苅田知則\* 加藤公史\*\*\*  
(愛媛大学教育学部)\* (愛媛大学大学院教育学研究科)\*\* (愛媛大学教育学部附属特別支援学校)\*\*\*

KEY WORDS: 生活単元学習、アクティブ・ラーニング、キャリア形成

## (目的)

新学習指導要領では主体的・対話的で深い学びが求められている。知的障害のある子どもたちにとっても、個々の特性に応じた学び方により、教師や友だちとの伝えあいによる主体的・対話的で深い学びを促すことができると考える。本研究では附属特別支援学校における生活単元学習の12年間を見通した授業づくりを、児童生徒が気づき、考え、行動することができるアクティブ・ラーニングの視点から検討することを目的とする。

## (方法)

知的障害特別支援学校(教員26名、児童生徒58名)において授業実践・授業研究を行い、以下について理論的考察を行なう。

### (1) 高等部における生活単元学習の見直し

高等部の生活単元学習は学年ごとに行われていたが、学び方別に学習集団を編成し、学習展開の工夫、学習効果の向上を図る。

### (2) アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた生活単元学習の検討

アクティブ・ラーニングの視点を取り入れることにより、生活単元学習における学びが深化しているか、実践事例から検討する。

### (3) 小学部から高等部まで12年間の生活単元学習の系統性に関する考察

児童生徒が自らの気づきを促す活動内容や合理的配慮を提供することで、生活年齢に応じた生活課題に自ら取り組める環境設定を行い、効果を検討する。

## (結果)

### (1) 高等部における生活単元学習の見直し

#### ①「学び方別(縦割りグループ)生活単元学習」の検討と実施

学び方別(縦割りグループ)生活単元学習は、単に能力別に類型化するのではなく、生活上の生徒の課題、得意とする認知方法などに焦点を当て、生徒が効果的に課題解決に取り組むことを目指して編成、授業計画を作成した。実際の活動を進めるに当たり、生徒の中には新たな生活単元学習班への所属の意味等が理解できていない者もあり、一定の見通しをもって学習できたものの、教員が意図した目標や課題意識、見通しをもって学び切れたとは言い難かった。

#### ②作業学習班別生活単元学習の実践

①の授業実践を踏まえて、作業学習と同じ(縦割り)構成メンバーによる生活単元学習を編成した。生徒が作業学習で身につけた力を仲間との協力・共同により発揮することができ、自らの価値に気づきながら地域に貢献することを目標とできると考えた。

この生活単元学習による効果は以下の2点である。①身近な人(地域)から評価されることによって、活動の振返りが容易になり、自らの存在価値を見出しやすい。②作業で身につけた力を発揮する場が明確であり、生徒自身が結

果だけでなく、過程の評価を実感することができる。

### (2) アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた生活単元学習の展開

小学部:「ほしぐみキッチン」「ほしぐみレストラン」

中学部:「中2お楽しみ広場」

高等部:「チームクリーン」(作業学習班別生活単元学習)

### (3) 小学部から高等部まで12年間の生活単元学習の系統性に関する考察

<小学部段階における生活単元学習の役割>

小学部では、自分が確かにできる活動で自信をつけること、それを他者から認められることにより、自己に気づくことが課題と考えられる。

<中学部段階における生活単元学習の役割>

中学部では家庭から学校、学校から身近な地域へと活動の場を広げていくことで、卒業後の社会生活において、自分が地域の中で何ができるかを見つめる時間とすることができる。また生活単元学習で自己の活動範囲や活動内容を広げ、地域とのつながりの中で「生活意欲」を高めることにより、高等部でつけようとしている「働く意欲」の基盤をより確かなものにするのであろう。

<高等部段階における生活単元学習の役割>

高等部での作業学習は小学部・中学部での生活単元学習、中学部での作業学習でつけた生活に対する意欲を「作業」につなげることで、働く生活をイメージすることが目標となってくる。「働く」ことの意味を理解した上で「働く」意欲を向上させるためには人との関わりを意識して作業が為されることが必要である。自分たちの活動の価値を見出すためには作業に習熟するだけでなく、他者から認められることが必要であり、身近な存在や身近な地域で活動の価値、自分の価値を見出すことは生活単元学習でこそ果たされる。

## (総合考察)

アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた生活単元学習の授業づくりから子どもたちの力を最大限に引き出す授業に必要な要素は①内面が動く活動を設定する、②児童生徒自身もつ力を十分に発揮できる場面設定・手立てが明確である、③教師の支援の変化、であることが見えてきた。

自らの存在価値を見出すことは社会的文脈の中で為される行為であり、学齢期において知的障害者、障害の重い人々たちを、分かりやすく設定された社会的文脈のなかでどのように育てるかが課題である。社会的文脈への理解を深め、「働く生活」を実現させるために、小学部段階での自分の良さ=価値に気づき、他者意識を育てること、中学部においては身近な地域の中で自分の価値を発揮できる力を育て、さらに他者の価値にも気づけるようにしていくこと、高等部においては自分が行っていることの価値を確認し、働く生活と関連付けるといふ、12年間にわたる指導・支援の系統性が示唆された。

(YOSHIMATSU Yasufumi, KASHIKI Nagako, KARITA Tomonori, KATO Koji)